

谷 船 恒 生 消え た女

NON NOVEL



長編推理小説
書下ろし



NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれて、つねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—127

長編推理小説 船に消えた女

定価 690 円

昭和 56 年 4 月 5 日 初版第 1 刷発行

著 者	谷 恒 生
発 行 者	伊 賀 弘 三 良
発 行 所	祥 伝 社

東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル 下 101
電 03 (265) 2081 (代表)

印刷所	萩 原 印 刷
製本所	明 泉 堂

長編推理小説

恒生
に消えた女

祥伝社

目次

第一章

娼婦溺死できし

8

第二章

若妻慘死

48

第三章

同行者

85

第四章

もつれた糸の方程式

120

第五章

正気と狂気

166

第六章

ジョーカーの葬送そう そう

201

カバー構成・CEへ小松原京子
本文イラスト・伊勢田邦貴

第一章 娼婦溺死

1

娼婦の溺死体が発見されたのは三月二十日の未明であつた。

横浜・本牧埠頭F岸壁突端の橋桁に、その娼婦はゴミのかたまりと一緒にひっかかっていた。

発見者はF岸壁に繋留していたリベリア船籍の貨物船バージニア号のフィリピン人乗組員である。彼フランススコ・タボタボは午前五時の碇泊当直交代後、釣具を携えてバージニア号のタラップを降り、F岸壁突端まで歩いていった。

ことのほか寒さによわいフィリピン人が早朝、釣りにでかけることは奇異に感じられるかもしれないが、タボタボは釣りに目がなく、行く先々の寄港地で早朝の釣りを習慣としていたのだ。これはバージニア号乗組員たち

の証言から明らかである。

娼婦は顔をうつ伏せにして沈み気味に漂っていた。瘦せた背中にダンボールの切れはし、木片、藁その他のゴミがまつわりつき、盛りあがり、藻のように揺れる髪がなければ、港の表面にいくつも漂っているゴミのかたまりと見誤ってしまうところだった。

タボタボはあわてふためいてバージニア号に駆け戻り、溺死体発見を船長に報告、船長から神奈川県警に連絡が入ったという経過だった。

県警はただちに現場へパトロールカーを急行させ、綿密な現場写真撮影を済ませて、溺死体を岸壁に引きあげた。

娼婦はくたびれた化粧のワンピースの上から、灰色の地味なカーディガンをはおり、ストッキングは着けていなかった。その服装から判断して、娼婦は自宅にいたところを車で連れだされたものとみなされる。なぜならば、ここ数日、朝晩、冷えこみがひどく、日中でも二月初旬のような平均気温で、そのような軽装のふだん着姿で外出したとは考えられないからである。

検視解剖の結果、死因は絞殺。死亡推定時刻が三月十八日の午後四時半前後、背後から細引きで首を締め、死

にいたらしめたものと判明した。抵抗のあとはない。局部に情交の痕跡も認められなかった。

被害者の身許は、死体発見後一日経過した三月二十一日に割れた。

横浜から車で約一時間の川崎港分港界隈の船員酒場『オリオン』でホステスをしている長崎洋子、二十三歳である。

「怪しい空模様じゃな」

源爺が葦簀越しに空を見あげた。西から東に黒雲のかたまりが異様な速さで飛んでいく。低気圧が接近している証拠だ。

日高 凶平はブリキの燗どっくりの酒を肉の厚いグラスに移すと、嚙むように含んだ。熱燗が荒れた舌を刺した。連夜の深酒で胃がだいおやられているようだ。このところ食欲がなく、胸焼けがひどい。

「ヨウコのまぐろがあがったそうじゃな」

源爺が大葉を巻いたイカの糸造りを縁台に乗せた。皺に埋れた眼が暗く沈んでいる。

「犬飼は、殺ったやつは客らしいと言うとったが、あいつの勘も当てにならんからの」

「犯行現場はアパートか」

日高が乾いた声で呟いた。

「たぶんな」

源爺は疲れたような溜息を洩らすと、首にかけた手拭で鼻水を拭った。

「ヨウコの部屋はひどく荒らされていた。現金も貯金通帳も盗られておったし、ヨウコの髪、唾液などが検出されたそうじゃ。部屋にヨウコの指紋がほとんどついていなかった。犯人が拭き取ったのじゃろう。物盗りの犯行のように見えるが、それなら死体を海へ棄てる手間をかけたのが納得できん。これも犬飼の受け売りだがな」

源爺の屋台は、港へ続く掘割沿いの道路から五十メートルばかり路地を入った空地の隅に、ひっそりと灯を点している。

冬の夜は骨がしびれるほど冷えこみ、夏はうだるような暑さで、掘割に湧いている藪蚊に悩まされる。

掘割からただようアンモニアとオイルの入り混じった臭気が一年中こもり、さわやかな日は数えるほどしかない。

源爺はなにが気に入っているのか、その空地から頑として動こうとしない。

日高が界限に足を踏み入れた十数年前から、源爺は背中に築港と染め抜いたうすぎたない半纏を引っかけて屋台をだしていた。以前は船乗りだったという噂だが、界限の者たちは素姓はおろか本名さえ知らない。

日高は界限に巢喰うようになって四年、暇さえあれば源爺の屋台に顔をだす。

海と港に厭気がさして、船を降りたわけではない。辞表を提出しなければならぬ羽目に、なんとなく追いこまれたのだ。

だが、船乗りを辞めても海と港には未練がある。波止場界限によどむ腐臭のような臭気も性に合うようだ。だからこうして日本船舶鑑定協会の鑑定人として、川崎分港という錆びついたようなローカル港に四年も腰を落ち着けている。

父親がし、れのつもりでつけた凶平という名が船からひきずり降ろしたと言えないこともないだろう。日高が乗船する貨物船は何の因果か、衝突、座礁を繰り返えし、乗組員が不慮の事故に遭う。アフリカや南米の革命クーデター騒ぎには巻きこまれる。いつしか乗組員の間から、日高一等航海士は船に禍を招き寄せるという噂がたちはじめるようになった。

辞表を出すきっかけをつくったのはこの港、川崎分港である。

六年ほど前、この港にヴィ繫留していた日高の貨物船を警察に追われた麻薬密売グループが占拠し、拳銃をふりかざして出帆を迫った。一等航海士だった日高は麻薬密売グループの威脅に屈せず、船橋に立てこもる彼らに意表を衝いてプレッシャーの利いた海水を浴びせて、動揺しうろたえる彼らを縛りあげてしまったのだ。

だが、その行為は社からも組合からも船長の意向を無視し、乗組員に無謀な行ないを強要したとして、嚴重に注意されるとともに、暗に辞表の提出を求められたのだった。

社を辞めて二年あまり、自国の船会社から追われた無頼な船乗りどもが乗るいかがわしい便宜置籍船を渡り歩き、あるきっかけでこの港の鑑定人におさまったというわけだ。便宜置籍船とは税率の極端に少ないリベリア、パナマ、ケイマンなどの国に便宜的に船籍を置く船のことで、船会社の多国籍企業化、くだけていえば税金逃れのために船籍を変えた大企業の船である。

「ヨウコはかわいいそうなのをしたわい。これからじゃというのにな」

源爺が鋭い眼を半ば閉じた。沖の海が重くどよめいている。明日はまちがいなく時化するだろう。

「犯人が船乗りなら逮捕はかなり骨だろう」日高がうつ向き加減にグラスを口へ運んだ。「犯人の乗っている船はいまごろどこかの海を航走っているんだからな。証拠もなにも消されちまうだろうし、証言だって曖昧になる。だいたい船乗りが出帆した港のことなど憶えているはずがない」

「じゃが、船乗りが界限の娼婦を殺すかな」源爺が酒に燭をつけながら呟いた。「衝動的に殺ったのなら話は別だが……」

「犬飼はなんと言っていた」

日高がグラスの酒を一息に干した。

「別に」源爺が答えた。「物盗りではないとだけ言うのだったわい。かなり自信をもってな」

「船乗りの線で洗いはじめたのさ」日高はイカの糸造りを口に放りこんだ。「やっこさん、いつもは口がかかるいが、捜査のことになると人が変わったように慎重になる。やつもプロだぜ、迂濶に口をすべらしたりしない」

「よその事件じゃというのに」

源爺が燭どつくりを差しだした。

「だから、よけいに用心深くなるのさ。県警の刑事連中に界限を嗅ぎまわられるとそれこそ、どんなボロがでてこないとも限らない。やっこさん、ボロ隠しに躍起だろうぜ」

「そういう按配か」源爺が含み笑った。「界限に軒を連ねた船員酒場が、実は売春斡旋所で、ホステスは娼婦、マネージャーはポン引きだということが県警に知れば所轄は大目玉を喰うじゃろうからな」

「しかも、界限の管轄が犬飼で、その犬飼が酒場の裏口から顔をのぞかせ、タダ酒にありつき、月々一軒あたま五千円の目こぼし料をせびりとっているとなるとただじゃすまない。やっこさん、まちがいなく鹹首だ」

「そうはならねえだろうよ」

葦簀の向こうから粘液質のだみ声がからかうように流れてきた。さすがに刑事だ、靴音も気配も消していつの間にか忍び寄っている。

葦簀の間から頬骨の突き出た陰気な顔がのぞいた。相変わらず煮しめたような鳥打帽を目深にかぶり、くたびれたレインコートの襟を寒そうに立てている。源爺の半纏と同様、犬飼の風体は一年中変わらない。

「人の悪口を肴に飲む酒はさぞかしうまいだろうな」

犬飼は皮肉たっぷり二人を見やり、長椅子をまたいで日高のとなりに腰を降ろした。

風が凍てついた音を立てて路地を吹き抜けていく。界限の春はまだだいいふ先だ。

「今夜も冷えこむわい、神経痛が痛うてかなわん」

源爺が、屋台の中で脚のゆがんだ丸椅子にすわりこみ、七輪の炭火に節くれだった手をかざした。

「捜査は進展しとるかの」

「爺さん、熱いやつを頼むぜ」

犬飼が、凍えた掌に息を吐きかけながら催促した。

「こちとら、身体の芯まで凍えちまってるんだ。界限の娼婦がおかしなくらゐばかり方をしたおかげで、寒空の中を靴の底がすり減るほど歩きまわらなけりゃならねえ。まったく迷惑な話だぜ」

「迷惑じゃと？」

源爺の白毛混じりの眉が微かに逆立った。

「おめえ、いつからそんなに大層な口がきけるように出世したんじゃ。小遣い銭に不自由せんで上の坊主を私立の小学校へ通わせられるのも、界限があり、娼婦どもが身体を張って稼ぐからこそじゃろうが」

「そうむきになるなよ、爺さん」

犬飼がとっさに卑屈なへつらい笑いを浮かべた。所轄勤めをしてかれこれ十年、犬飼は源爺にどれだけ尻尾を握られているかしのれないのだ。

「それにしても県警の阿呆ども、凶さんまで容疑者リストに入れてやがる。まともに付き合っちゃいられねえやな」

「道理でこの二日ばかり、野良犬野郎がオフィスのまわりをうろついていると思ったぜ」

日高が不快そうに言った。

「あんたからわかるように説明してやってくれ、県警なんぞに呼び出されでもしたら、せつかくもぐりこんだ職場から追いだされかねない」

「すまねえ、間抜けばかりで」

犬飼は源爺がそっけなく置いたグラスに口から先にもっていき、きたならしい音を立ててすすりこんだ。

「うめえ、五臓六腑にしみわたるとはこのことだぜ」

「県警はどうして俺に目をつけたんだ」

日高がじろりと視線を向けた。

「評判がめっばういいからさ」

犬飼が半ば羨ましげに言った。

「界限の娼婦連中は凶さんのことになると眼の色を変え

て弁護しやがる。刑事だって人の子だ。もてる野郎はおもしろくねえ。そんなやつは別件で挙げ、県警の取調べ室で反吐の出るまで締めあげてやろうと思うものさ

「尻の穴の小せえ刑事ばかりじゃて。もっとも凶さんが相手じゃむこうさんが音をあげてしまうだろうがな」

源爺が意地悪く笑った。

「界限の酒場は今夜もネオンが点っているのか」

日高が言った。

「一日だって休むものか」

犬飼が吐きすてるように言った。

「『オリオン』の娼婦が土左衛門になっちまったんだ。

ほかの酒場だって通夜の晩ぐらい灯を消して死んだヨウコの冥福を祈ってやってもよさそうなものじゃねえか。

そして、一週間は商売を自粛する。なにしろ、界限には県警の刑事どもが七、八人も張り込んでいるんだ。売春で挙げられたら、元も子もないじゃないか」

「あいにくじゃが、娼婦には仕事を休むだけの余裕がないんだわい、おめえも知っとるじゃろう。石油ショックからこのかた、入港する船が年々、目減りしているのをな。県警の刑事は、捜査一課、殺人事件の犯人を挙げる

ために港のカラッ風に吹きさらされながら界限の路地をうろついている。売春の検挙は風紀係だということぐらい、娼婦たちは先刻、承知しとるよ」

「爺さんの入れ知恵だろう、かなわねえな」

犬飼は平手で額をびしゃりとたたいた。

日高はグラスの底に溜まっている酒をすすった。界限が不祥事を起こすたびに源爺と犬飼は同じやりとりを繰りかえす。そうしながら捜査の方針や進行状態をそれとなく伝えるのだ。

「酔ったか」

日高は千円札を一枚、前台に置くと億劫そうに長椅子から立ちあがった。

外は風が強かった。湿気を含んだ風が伸び放題の髪を散らし、酒気を帯びた顔にどぶ臭いにおいを浴びせて吹き過ぎていく。

日高は人気のない路地を掘割に向かって、脚をひきずりながら歩いていった。掘割沿いの道路へ出ると、河口に繋がれた曳船の群れのオレンジ色の灯火が、漁火のようになじんでいる。

日高は曳船だまりまで歩くと、不意に脚を止めた。曳船の灯に照りかえされた掘割の水面が鈍く光り、日高の

影をゆらめかす。

「凶さん？」

足許の暗がりです不安そうな呼びかけが聞こえた。曳船に乗り移る浮棧橋に黒い影がひっそりうずくまっている。

「凶さんでしょ、来て」

声で相手がわかった。日高が帰りがけにここを通るところを見越して待っていたのだ。

日高は両手を防寒作業衣のポケットに突っこみ、投げやりな足どりでコンクリートの階段を降りていった。うち寄せる波音が間近に聞こえる。煙霧のように散る飛沫が顔に降りかかり、舌に触れる。

相手の影が急に伸びあがった。すぐ横に繋留してある曳船の碇泊灯の淡い光のただよいに、顔の輪郭がぼんやり浮きあがった。

ミハルの眼が凍ったようにひらめいた。

蒼ざめた頬が小刻みにふるえ、一文字に引き結んだ薄い唇が微かにわなないている。

「凶さん、あたい」

ミハルは喉をつまらせながらやっとそれだけ言うと、昂ぶった感情をぶつけるように日高の胸にむしゃぶりつ

いてきた。汚れた兎革のコートを通して彼女の体温と激しい動悸が伝わってくる。

やがて、感情の昂ぶりがおさまったらしく、ミハルは日高から離れ、浮棧橋の端まで歩いていった。

「凶さん、ヨウコの仇を討って」

ミハルは闇の海を睨み据えながら斬りかかるように叫んだ。

「あたい、ヨウコを殺したやつがにくくてたまらないよ。ヨウコはね、あと二カ月ぐらいで足を洗おうとしていたんだ」

日高は煙草をくわえ、ジッポを擦った。炎が瞬間、日高の顔面に躍った。

「警察に呼び出されたのか」

日高がほとんど口を動かさずに言った。低いが、底力のある声だった。

「酒場でねちっこく訊かれたけど、なにも喋らなかつたよ。刑事なんかと口をききたくないからね」

「ヨウコが締め殺された夜、ヨウコは客に付いていたのか」

「いたよ、マニラ丸の操舵手で、確か車田っていったな。でも、殺したのは車田じゃないよ」

ミハルは自信をもって断定した。

「あたい、ヨウコと一緒に席に就いたんだ、あたいの馴染客が来て、若林って坊やだけどそれで、あたいがヨウコを誘ったんだよ。しけた晩だったからね」

十七日の晩はどしゃ降りで、それだけに客足が鈍く、九時をまわっても客は二組だけ、しかも一組はすかんぴんのフィリピン人船員三人ときている。彼らの懐は酒場の娼婦と遊べるほど潤沢ではない。便宜置籍船の普通船員の給料は相場が一五〇ドル、しかも、その七〇パーセントは本国に強制送金されてしまい、手もとにはほんのはした金しか残らないのだ。

フィリピン人船員たちはカウンターで一本のビールを舐めるように飲んでいた。ときおり、ものほしげな視線を投げるが、娼婦のほうも懐具合がわかっていいるから寄りつかない。隅のボックスで手持ちぶさたそうに煙草などふかしている。

雨をとまった風が安普請の建物に激しく吹きかかり、褪せた壁紙を貼った壁が揺らぎだすように気味がわるい。

ヨウコは隅のスツールに腰かけていた。カウンターに

頬づえをつき、ハイヒールのとがった先で拍子でもとるようにカウンターの前板をたたいていた。しけた晩なのに、なぜか妙にうきうきしていて、時々、思ひだし笑いを浮かべていた。

「どうしたのさ、ヨウコ」

水割りをつくりにきたミハルは、不審そうにヨウコの顔をのぞきこんだ。

「一人でにやついてて、万馬券でもとったのかい」
「ようやくね」

ヨウコが人差指でかるくミハルの頬をはじき、うれしくてたまらないといった様子で相好をくずした。

眼が細く、やや鼻がしゃくれ気味だが、色白で男好きのする小柄な娘だ。ミハルの耳ぐらいしか上背がない。一メートル五十そこそこだろう。その割りには胸が大きく、腰がくびれていて、支那服がよく似合う。そして、なによりヨウコの身につけている素人っぽい無邪気さが客を惹きつけるのだ。

「たまったんだよ」

「たまったって、これ」

ミハルが親指と人差指でマルを作るとヨウコはこっくり頷いた。